

2 用語の解説

番号	ページ	用語	
1	5	構音障害	<p>語（例「とけい」）は、音節（「と」「け」「い」）から成り、各音節を構成する語音（「と」の〔t〕と〔o〕「け」の〔k〕と〔e〕「い」の〔i〕）から成る。この語音を発声器官を通じて作り出すことを構音という。構音障害は、下記～のように、この構音がうまく出来ず、その結果誤って語が発音されてしまうことをいう。</p> <p>音の省略（例 風船 ウーセン） 音の置換（例 コップ トップ） 音の歪み（文字で表記できないが、聞いた感じに歪みがある） 音の添加（例 じどうしゃ じんどうしゃ）</p>
2	7	A D H D	<p>Attention-Deficit/Hyperactivity Disorderという米国精神医学会の診断名。注意欠陥／多動性障害と訳されている。WHOでは多動性障害という診断名。中枢神経系の機能障害が推定される。</p> <p>落ち着きのなさが小学校高学年になっても解消されず、周囲の児童との関係がうまくとれず、多動、衝動性、注意集中困難が強まる症候群。</p>
3	8	箱庭	<p>内法57×72×7 (cm)の砂箱に人間、動植物、建造物、乗り物等のミニチュアを自由に配置させ、ある風景、場面を構成させる。</p> <p>構成された場面に投影されている心理の査定法である。また、心を癒す治療的な心理療法としても実施される。この事例では、後者の位置づけが主となっている。</p>
4	8	ロールプレイング	<p>役割演技法。他者と適応的な社会的相互作用をもつためには、他者や社会から期待される役割を認知し、それに応じた行動が必要である。そのような役割行動を、社会的に規定されたものとしてではなく、自発的、想像的に演ずることを役割演技という。役割を演ずることにより、個人はその役割を改めて意識し、深い理解が可能になる。また、役割交換により他者の立場や感情を、身をもって理解し、他者によって演じられる自己を見ることが出来る。この技法は、社会的適応の教育や訓練、習慣や態度の改善、心理療法等に用いられている。</p>

5	8	プレイセラピー	<p>児童生徒を対象とした遊びを用いる心理療法。児童は、たいてい自らは治療意欲をもたず、自己について言語的に表現する能力や、自己を内省する能力が十分発達していないので、成人の治療における形式や方法をとることが困難である。</p> <p>しかし、児童生徒は、その主な活動である遊びの中で、行動によって自己を表現している。しかも、児童生徒にとって最も他者と関係をつなぎやすいのは遊びにおいてである。それゆえ遊ぶことが、心理査定だけでなく、治療手段にもなる。</p>
6	9	退行現象	<p>欲求が満たされなかつたり阻止されるとき、心的機能が、年齢に相応した発達段階から以前の段階にもどること。幼時的傾向、現実を受けとめ検討する力の低下、耐性や自己統制力の低下等が見られる。</p>
7	10	平行遊び	<p>他の子どもの遊びを見て、そばで同じ遊びをするが、子ども同士の相互のかかわりがない状態。2～5歳の幼児に見られ、一人遊びから集団遊び、ルールのない遊びからルールのある遊びへと発達的に変化する子どもの遊びの過渡期に現れる。</p>
8	12	自己有能感	<p>肯定的な自己像。失敗体験が積み重なると「自分には能力がない」と自己について否定的なイメージを持ちやすい。生活・遊び・学習・役割活動の全部の面で成功体験を持てなくても、どれかにおける成功体験での成就感を通じて形成する「得意とは言えないが、自分にもできる」という自信の基盤。「自信」は「得意とする」ニュアンスもあるので、この研究では「自己有能感」とした。</p>
9	13	二者関係の形成	<p>子どもの発達における対人関係は、母親との二者関係に始まり、父親や兄弟姉妹との三者関係、身近な保母や教師との関係、他の子どもとの関係に広がっていく。幼児は、母親から分離しきれていないので、愛情を独占しようとして、第三者たとえば兄弟を排斥しようとし、そこに葛藤が生じる。その葛藤をコントロールしようとしていく中で三者関係すなわち社会性が形成される。二者関係の形成は三者関係形成の基盤であり、それが不十分な場合、子どもの社会性の形成において課題が生じることがある。</p>
10	15	継次処理	<p>学習過程を情報処理過程とみなし、情報(広義の学習における外部からの刺激)を連続的かつ逐次的に分析し、認知する情報処理である。順序立てて理解することが比較的得意なやり方とも言える。</p>
11	15	同時処理	<p>情報を概観可能な全体に統合し、全体から、各部分とそれら同</p>

			<p>士の関係を認知する情報処理である。たとえば、ことばでの指示よりも、絵カードやシンボル表示での理解を得意とする場合、同時処理が比較的優位であるとされる。</p>
12	15	多動抑制薬	<p>注意集中困難、多動などの状態は、神経系が一見過剰な興奮状態にあると考えがちであるが、逆に中枢の覚醒水準が低いために起こる現象である。そのため、多動抑制薬としては中枢刺激剤が用いられる。副作用としては、就眠前使用による不眠、長期使用による食欲低下等がある。</p>
13	15	非言語性LD	<p>主として視覚・空間認知に弱点がある。日常的な言語能力は比較的高いが、具体的な行動面で思いがけないつまずきがある。運動能力に弱点がある場合が多く、不器用さや協応動作の悪さにつながる。漢字の習得や読みが苦手な例もある。しかし、注意・記憶に弱さがなければ、得意な機械的学習の結果として読み能力・言語能力は平均水準にあることが多い。状況認知が悪く、周囲が理解しにくい行動もあるため、対人関係に問題をもちやすい。言葉による援助や再言語化による行動調整を図る。</p>
		(言語性LD)	<p>主として言語能力に弱点がある。聴覚認知の弱さのため、一斉指導の中で言葉による指示を理解しにくい。読み書きなど国語の基礎能力が低い。全般的に低く評価されやすいが、具体的な行動面では潜在能力の高さを示す。注意・記憶の弱さが重ならなければ、計算能力は平均的水準であることが多い。注意・記憶の弱さが重なる場合を、重複言語性LDとする。</p> <p>言語理解を助けるために、具体物を使った視覚的援助が有効である。</p>
14	17	認知	<p>心理学で、人の能動的な情報収集・処理活動（知覚、判断、決定、記憶、推論、課題の発見と解決、シンボルや言葉の理解と使用など）を総称する用語。能動的な情報収集・処理活動とは、人が生まれつきもっている情報または経験から得た情報に基づいて、外界の事物に関する情報を選択的にとり入れ、それによって事物の相互関係などに関する新しい情報を作ったり蓄積したり、他者に伝達したり、あるいはその情報を用いて適切な行動をすることである。</p> <p>たとえば、音声が聞こえているだけでなく、その音声を意味づけながら聞くことは聴覚認知であり、物が見えているだけでなく、位置、形、色、大小、相互関係など対象を意味づけながら見ることを視覚認知という。また、自分の体の向き、体と周囲の事物との位置関係や、事物相互の位置関係、方向、大小などを意味づけて、視覚や平衡感覚などを通じて理解することを空間認知という。</p>

用語の解説の作成にあたって参考にした文献

平凡社(昭和58年刊)「心理学事典」

学文社(昭和59年刊)「教育心理学用語辞典」

福村出版(昭和62年刊)「心身障害辞典」

日本文化科学社(平成6年刊)「学習障害児の教育」

有斐閣(平成7年刊)「心理学小辞典」

培風館(平成8年刊)「心理臨床大事典」

丸善メイツ(平成9年刊)「K - A B C アセスメントと指導」

東京都教育研究所相談部心身障害教育研究室(平成11年刊)「教育じほう」